Ill Seen Ill Said Ill Listened: In the Margins of a Foggy Town

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 悟, Takahashi, Satoru メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/396

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ミチガイイイチガイキキチガイ　霧の街の余白に

Ill Seen Ill Said Ill Listened: In the Margins of a Foggy Town

Satoru Takahashi 髙橋　　悟

図 1
聞こえないを聴く・見えないを視る
CASE-3　霧の街のポリフォニー　2021
実験展示 EREHWON ～いまここにありどこもにもない場所
（河原町塩小路下ル国道蓋掛け広場）
写真撮影　髙橋悟

はじめに～彼岸からの風景

海外から日本に滞在するアーティスト達が思い描く Japan のイメージに軽い戸惑いをおぼえるのは私だけではないだろう。受け継がれてきた伝統的な技や習慣、先端技術、アニメーションを含むサブカルチャーなど想定された魅力的なイメージ、その中に自分が暮らしているという実感が持てないからかもしれない。けれども、それらをオリエンタリズムとして、やりすごしてしまうのも一方的な気がする。他者から想定されたイメージの中に暮らすことへの戸惑いは「いまここ」という場所や歴史への戸惑いでもあるからだ。

最近のことだが、溝口健二監督の映画「浪速悲歌：なにわえれじい」（1936）を観る機会があった。そこで描かれた大阪の街は近代建築が立ち並ぶモダンな都市の顔を持っている。主人公は西洋風のファッションとデモクラシーを身にまとう一方で、因習的な家族関係、階級格差

の葛藤から逃げ出そうともがく若い女性だ。1936年は青年将校によるクーデター「二・二六事件」が勃発し、ベルリンでは「第11回オリンピック大会」が開かれた年だ。この時代について私は、やがてくる世界大戦に向かう暗く不穏なイメージを持ち続けていた。けれども「浪速悲歌」からは、そのような空気とは異なる市民の世界観がうかがえる。彼らの視線の向こうには、廃墟と化すような大阪は微塵も想定されていなかっただろう。ほんの一部の人間をのぞく多くの人たちは、狐につままれたような感覚で、実態はわからないまま戦争へと巻き込まれていった。現在の私達は、85年前の市民の視線がみつめていたであろう、その未来のイメージの中に暮らしてはいない。ずいぶんとかけ離れた地点に立っている気がする。「いまここ」という場所への戸惑いは、時間と場所を共有し得ない、黙した他者の存在を忘却することなしには進めない現実原則への戸惑いなのかもしれない。

【Ⅰ】『Chatter Box：おはなし箱』

—小屋。その位置。注意。さあ。形のない空間の存在しない中心。

—こんなところで、小屋がいったい何の役に立つ。

—もうみんなこんがらがっている。もっと慎重になることもできる。そこに一緒に閉じ込められる。がらくた全部。そして見張っているものも。

—もしすべてが影でしかないとすれば。存在することも、存在したことも、存在しうることもないとすれば。静寂。

—闇から仕切り壁が出現する。それが徐々に消え、一続きの空間となる。

—眼はくつろいで息をつぐが、そう長い間ではない。なぜなら、ゆっくりと、壁はまた組み立てられるから。床からゆっくり立ち上がり、闇の中に消える。

—がらくたのせいで。でたらめな見方、でたらめな言い方。黒がこわい。白がこわい。空虚がこわい。

—両手はきつくしめられ、またほどける。ゆるやかな収縮と拡張。なけなしのこの体。

—突然、穏やかに。上に動くときに離れ、下に動いて止まる。こうしてくぼみができる。

—ほんのちょっとめくれた口の隅に注意しよう。微笑？そんなことが可能か？

図2
京芸の移転先となる河原町塩小路下ル国道蓋掛け広場に設置された作品 EREHWON　トンネル・線路など広場の構造自体が巨大な音響装置となっている
写真撮影　髙橋悟

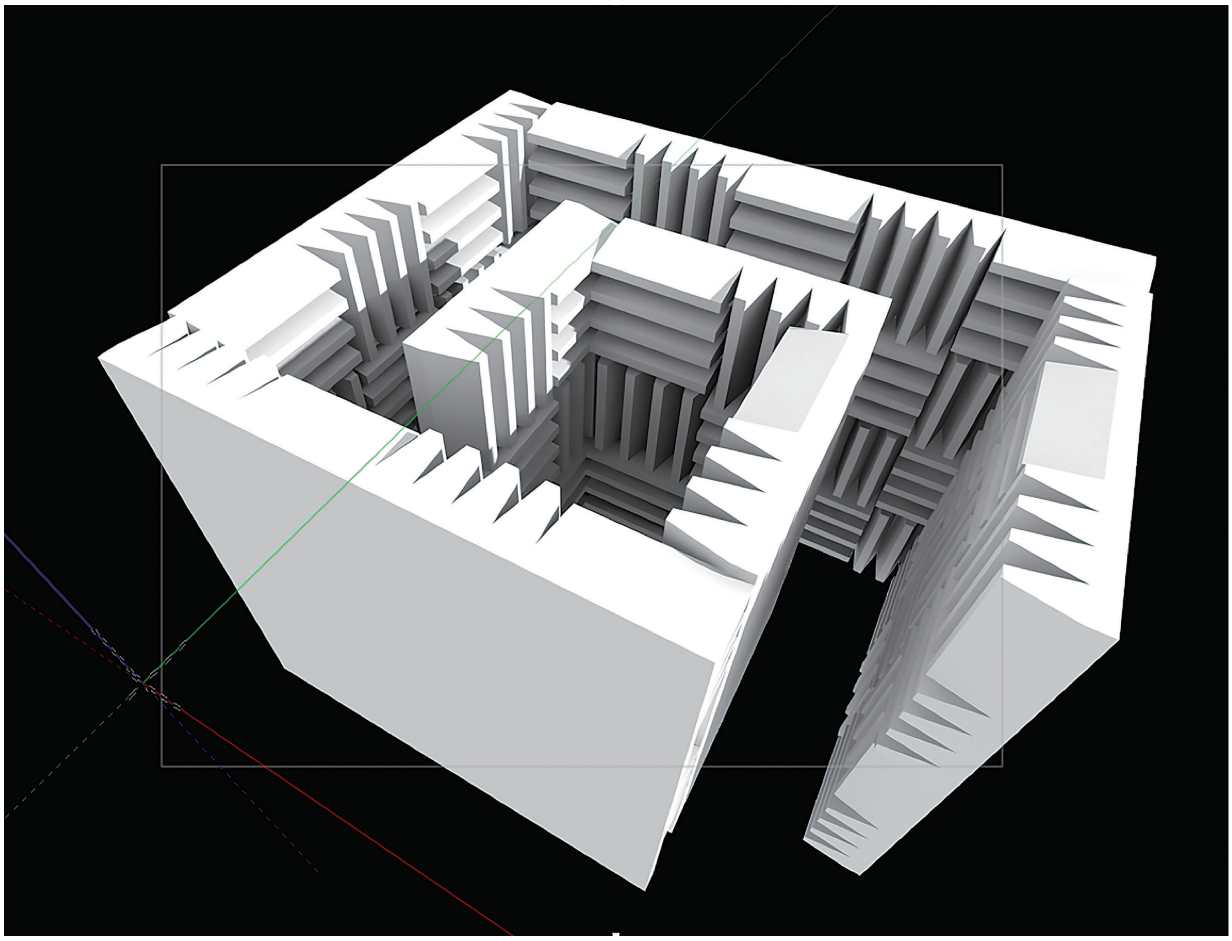

図 3
作品 CG － 1
耳の螺旋。中に入っていくほど音が小さくなるコンセプト
制作　髙橋悟

—変化が充分でない。充分遠ざかっていないのだ。

—突然飽き飽きして、追憶に場所をゆずる。

—椅子がまるで全部自分に似せて作ってあるように、まわりに調和しているのをすばやく見ること。ぎりぎりまで小さくなり。もうそれ以下はない。不在に向かって、無限が零に達するように一直線に。

—調べている最中に突然物音。調べ続けるうちに、意識が覚めてくる。これはどう説明しよう？

—もうなけなしの好奇心。

実験展示として河原町下ル塩小路通りの広場に設置した作品 EREHWON は、外からの騒音と内部の反響を抑える装置だ。扉を閉めると、その中はかすかな振動音と光のない闇になり、その中でポツンと自分の体だけがある。距離や方向の感覚、空間の大きさや自分の体の輪郭があやふやに感じられ意識だけがふわふわしているよう。ふたたび扉が開かれる瞬間に、列車、信号、車、工事、風、人声など音と光の振動をいっせいに浴びることになる。

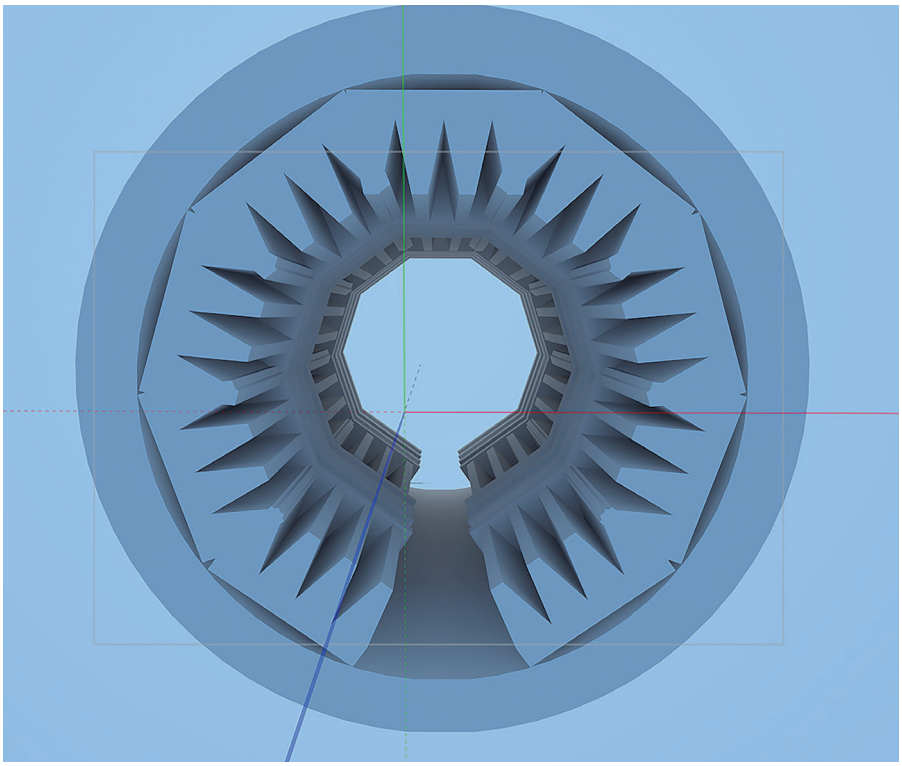

図 4
作品 CG 模型－ 2
空き地や工事現場の土管を利用するコンセプト
制作　髙橋悟

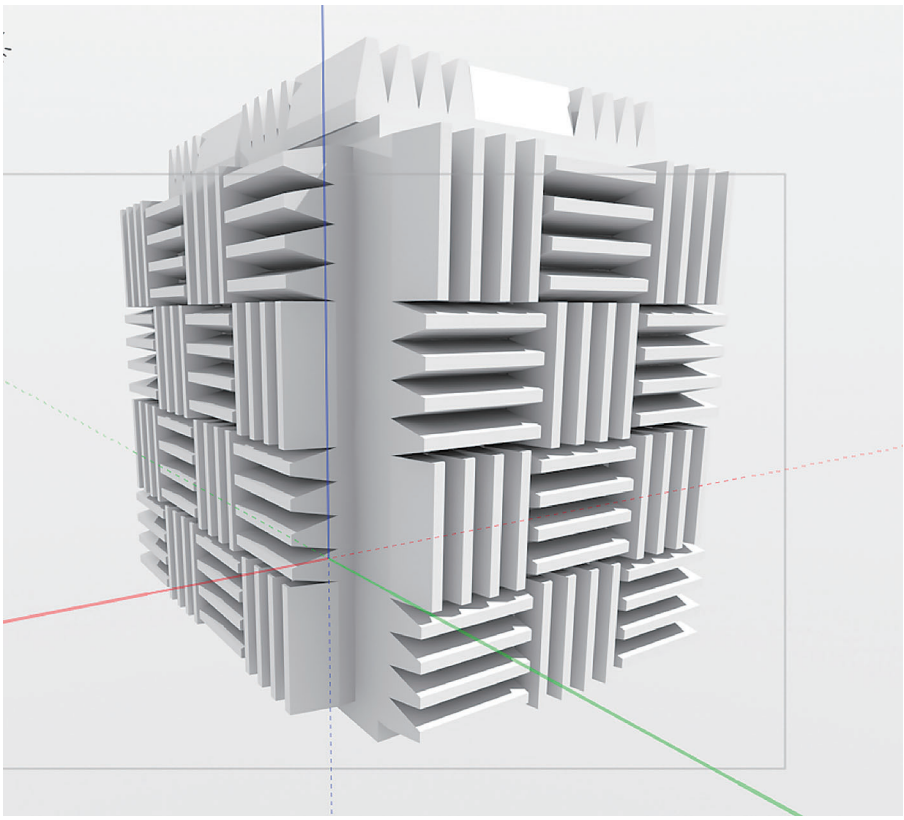

図 5
作品 CG 模型－ 3
場所から離接した人工衛星・音波のテトラポットとしてのコンセプト
制作　髙橋悟

【Ⅱ】『Dumping Site/Sight：工事現場 / 遺失物保管所』

好きでもない歌や声がくりかえし聞こえてくる。外の環境からではない。頭の中で誰かが歌う。探しものが見つからない、知らない土地で迷う、地に足がついた行動ができない、そんな時にしつこく鳴り響く。普段の生活では外からの刺激に反応し、状況にふさわしい行動をとる。けれども現実的な行動を取ることができない時、それまでは意識の背景となっていた影や騒音や窪みなどが様々なカタチとなって前景に浮かび上がってくる。いままでとはちがう優先順位を持った風景、まるでパンドラの箱が開いたような世界。一瞬だけ。それを忘れる。くりかえしはない。

・夜更かしした時に見る化物みたいなものを見はじめて怖くなった。何も聞こえないのが一番違和感を強く感じた。心細くなって、持ってる風船から手が離せませんでした。

・空間がどこまでも広がりながら肌に吸着している。

・地面は両足に必要な部分だけ。

・しばらくするとここがどこにいるかわからなくなり、自分の存在が不確かなものになっていく。

・基準とすべき背景がなにもない人間になる。自分自身に対しても他のものに対しても。

・あれ、ここ初めてじゃないな、あ、ここかと思った。朝でも昼でも夜でもなかった。

・闇という文字は中に音がある。

図 6　Dumping Site/Sight by Keiko Kurachi x Satoru Takahashi
作画　倉智敬子

・扉を閉められてから急に圧迫を感じた。つぶされるかと思った。音がスッと消えて遠くなる。このまま運びだされても ...

・割と終わりの頃、心臓を感じた。集中してみると、一拍ごとの音の大きさというかニュアンスというか、変化がすごく。一拍一拍大きく、大きく聞こえた。

（実験展示鑑賞アンケートからの抜粋）

4 年間にわたりミシガン大学で医学・社会福祉・美術の各学部と連携して記憶想起の共同授業・研究を行ったことがある。認知症を抱えたメンバー達（ここでは患者ではなくメンバーという呼称を使っていた。）は記憶想起の困難に遭遇するより先に、路に迷い家へ帰れなくなるなど徘徊が起こることが多い。徘徊が空間の座標軸に自己を定位することの困難とすれば、記憶障害は時間の座標軸に自己を定位することの困難なのか。空間にある場所が完全には消えることがないのと同じで、人の記憶自体が失われるということはない。手がかりが消失して引き出すことができなくなる？それとも、全ての記憶が等価となって浮遊しているのか？

ボブが上海でビジネスをしていたときのことを話してくれる。

—ボブ：「チャイニーズの音には→↑、→↓、→↑↓の 3 つのリズムがあってね。聞いていてとても楽しかった。アハハ！」。

—私：「そうなんですか！」。

数秒あとで

—ボブ：「それでね。上海でビジネスをしていたんだよ。チャイニーズの音には→↑、→↓、→↑↓の 3 つのリズムがあって、聞いていてとても楽しかった。アハハ！」

—私：「そうだったんですね。」

その数秒あと

—ボブ「それでね。上海でビジネスをしていたんだよ。チャイニーズの音には→↑、→↓、→↑↓の 3 つのリズムがあって、聞いていてとても楽しかった。アハハ！」。

—私：「そう～なんですね」。

同じ内容の話を繰り返し、繰り返し、30 分は聞かせてもらい頭の中がぐるぐるしてくる。時間が引き伸ばされる、あるいは、いましかない感覚。けれど、最近になってふと思った。本当にボブは同じ話を繰り返していただけなのか？コトバの意味は同じでも、声の抑揚、身振り、間合いはまったく同じではなかったはずだ。限られた記憶を手近な言葉で繰り返すボブの話には、別の表情があったのでは？

【Ⅲ】『エコー・チェンバーとロックダウン』

ロンドン大学ゴールドスミス校を拠点に活動するフォレンジック・アーキテクチャーのプレゼンテーションに接する幸運に恵まれた。フォレンジックとは科学捜査を指す言葉で、建築家、法律家、プログラマー、デザイナーなど異なる領域の専門家からなる調査集団がフォレンジック・アーキテクチャーである。彼らは、世界各地で発生している紛争、メディアや政府によって歪曲された犯罪についてデジタル・テクノロジーを駆使して調査し、対抗的な証拠をさまざまな場で公にすることで政治化する。その独自の方法のなかでも特に注目したのは、シリアの首都ダマスカス郊外のサイドナヤ刑務所における調査手法だった。刑務所に収監された人たちは、視覚情報を完全に遮断された暗闇での数ヶ月を過ごす。見ることだけでなく互いに話をすることも禁じられた中で、自分達がおかれた状況やこれから迫りくるかもしれない事態をとらえるために、収監者たちにできるのは闇の空間へ向けてじっと耳をすますことだけ。監視員の近づいてくる足音、建物内での反響音、かすかに聞こえる拷問によるうめき。これら音だけからなる記憶をてがかりに、フォレンジック・アーキテクチャーのメンバー達は、元収監者たちと協同でサイドナヤ刑務所の三次元モデルを再構築していった。Situated interview というこの手法により、元収監者たちは細部に渡る記憶を再構成してゆくが、心理的なトラウマがあまりに強い場合、間違った記憶イメージが述べられる場合がある。たとえば直列しているはずの独房群が、円環状に配置されていたというように。フォレンジック・アーキテクチャーによれば、客観的な記述だけを証拠とする事に意味があるのではなく、この場合、歪んだ知覚として記述される事で当事者の極限の精神状態を明示する証拠となるという。

「聞こえないを聴く・見えないを視る」事業の初年度（2019）は「CASE − 1 霧の街のアーカイブ」というコンセプトでプロジェクトを進めた。「霧の街」とは人口減少、

図 7
聞こえないを聴く・見えないを視る
CASE － 1 霧の街のアーカイブ プロジェクト　鈴木昭男「Make Up」2019
高瀬川のせせらぎを増幅する音響楽器：菊浜から崇仁までをつなぐ
写真撮影 髙橋悟

災害、紛争などでコミュニティーの環境や生活の遺産が消えつつある状況をさすが、本事業では地域のドキュメントを映像や言葉ではなく身体感覚や音という芸術固有の創造的な方法で記録する可能性を探った。そのためサウンドアーティストの鈴木昭男氏と共に、京都市立芸術大学の移転を前に変貌を遂げる崇仁地域でのフィールドワークを重ね、身体に作用する複数の音のポイントを示す地図を作成した。この地図は紙に印刷したものと、スマートフォンで閲覧できるウェブ上のものがあり、プロジェクトが終了した後も、地図を片手に街の環境の変化を捉えることができる。さらにガイドツアー、展覧会、シンポジウムへと複数の角度からプロジェクトを検証する方向へと展開していった。現代の社会では、SNS や情報を通じて情動を刺激し行為を誘導するマーケッティング戦略や公共空間で人の振る舞いを管理する不可視の力が拡散している。スリープモードの携帯電話に象徴される常時 ON 状態でつながりつづける時間の流れに対して、鈴木昭男氏の「日向ぼっこ」でぼうっとする技芸は、身体環境から考え直す端緒をひらく。悪意に満ちた管理コントロールの下で息をひそめ、暗闇にじっと耳をすますサイドナヤ刑務所の人々と、「日向ぼっこ」の空間を等価に重ね合わせるとき、私達は「聞こえない・見えない」記憶イメージへと導かれることになる。必ずしもそれらは幸福な記憶だけでないにしても。

【Ⅳ】『火災報知器』

「うちは大アジア家族や」。上を向くと青空が見える高瀬マーケットの二階でお母さんに 3 時間近く話しを聞かせてもらう。数年前の台風で屋根は吹き飛ばされポッカリとあいた穴。兄妹たちは、朝鮮半島の北と南そして日本に分かれて住む。「北のことテレビでみんな色々言うてる。けど、あそこでみんな上手に生きてはる。政治とは別に」。

在日コリアンの街として知られる東九条は、京都駅東南部に位置し、文化ゾーンの岡崎や祇園・清水など古都観光コースからは圏外の場にある。この地域は、戦前・戦後の混乱や差別、運動、その後の都市開発による変容を受けながらも違いを尊重し支え合う独自の文化を育くんできた。ここでは街の特色を思わせる多文化共生交流スペースや韓国物産店、教会、食堂などが戦後の集合住宅、昨今の民泊、ホテルなどと混在しながら「暮らしの生態系」を形作ってきた。その一方で地域の高齢化と人口減少への対策から、新たな開発計画・投資・買収など経済のネットワークが縺(もつ)れ、町の暮らしは大きく変わりはじめようとしている。

「霧の街のクロノトープ」は大阪万博ペプシ館での発表をはじめとする「霧の彫刻」で知られる中谷芙二子とアー

図 8
聞こえないを聴く・見えないを視る
CASE-2 霧の街のクロノトープ　プロジェクト　中谷芙二子 x 高谷史郎 2020
元マンモス団地跡地の空き地を霧でおおう
写真撮影　髙橋悟

ティスト・グループ「ダムタイプ」の高谷史郎の協力を得て進めた展覧会だ。プロジェクトの拠点としたのは東九条の北河原住宅（通称マンモス団地）跡地である。今回の企画で重視したのは、変わりつつある地域の記憶を映像やモニュメントとは異なる方法でいかに伝えるかであった：過去の思い出として静止化するのではなく、未来へとつながる経験として捉える方法。

中谷の「霧」は水による自然な霧を発生させる独自な装置による。今回の展示では、足場材で囲形状に構造を組み上げ、内側へ向けて約 500 ケの霧のノズルが取り付けられた。ノズルの下部には高谷が考案した照明が付けられ、日没後の霧を光の塊へと転換させる仕組みだ。霧の彫刻は入念に設計されたもので、ノズル噴射の時間差により対流を生み出す形が想定されている。ただし風向き、気温、天候など逆らうことのできない条件をコントロールするのではなく、それらと共存することで自然と共に形を変えてゆく。ノズルからのシューという音と共に霧の噴射が始まり空き地の中に霧が満ちる時、街の風景は驚くほど一変する。集合団地、閉鎖されたマーケット、洗濯物、放置された車両など、先程まで眼にしていた光景が、霧で侵食され現実的な中身を失ったイメージとなり視界から消えてゆく。そして自分の身体も霧に包まれるとホワイト・アウトの瞬間がやってくる。足元すら見えない真っ白な闇に包まれると、距離や方向感覚さらに自己という感覚すら曖昧な浮遊状態に落ちる。やがて霧の噴射がおさまり、徐々に視界が晴れてくる時、剥き出しの風景と共に、かつて住んだ人、いま暮らす人、はじめて来た人、互いに知らない者同士が、同じ霧に包まれていた事を知る。ひとつの霧の中で、複数の声がノイズが霧と共に形を変えていたのだ。霧は私達の身体と風景との出会いを美しく演出してくれる。しかし本当だろうか？霧の彼方から催涙ガスに追い立てられるデモの騒音が轟いてはこないだろうか？私達が目に見えるものを疑う時、その時はじめて歴史は思い出でではなく、未来へとつながる生きた記憶となる。

【V】『通話圏外～ EREHWON』

EREHWON を設置してから思い出した。
あるいは見つけ直した。
ほんの数年まえの。

「そこで想像してみる。なにかが地表の重みから開放され浮き上がってゆくのを。眼下に空き地で歌う子供たち。高度をあげる。都市の中にぽっかり空いた区画が見える。さらにぐんぐん高度をあげる。街から吹き上げる突風がすさまじく、歌声はかき消され、騒音とともに唸るようなヒトの鳴き声になってゆく」。

フェンスで囲われた崇仁学区の空き地で小学校の校歌をカセット・プレイヤーで再生した時のメモ。気象観測に使用する気球に録音機を着け高度 100m ほどまでゆっくり上げ、校歌が街の騒音にかき消されてゆく様子を記録した。

「自分が立つ両足のその基盤には、カーペット、床、コンクリートの土台、砂利、グリ石、土、粘土、砂が層をなして重なっていた。背丈を超える深さまで手作業で掘り進む。労働という制度の時間から外れた時間帯。更地に立ち上がる建築への対位法として。」

元崇仁小学校北館 1 階の更衣室で行った「アナ☆ボル」のメモ。
崇仁小学校の校歌は「黒き大地をやぶりて出ぬ」というコトバから始まる。そこには受け渡すべき歴史への思いが込められたのか。

「扉を開いた瞬間の体験は、あの上空の世界」。

「EREHWON の中の時間は、あの穴の中の時間」。

図 9
作品「装飾と犯罪」（倉智敬子 X 髙橋悟）より崇仁学区の空撮動画
写真撮影　来田猛

現実原則にそった行動を要請される地表の水平な時間軸とは別の時間軸。地下と上空をつなぐ垂直の時間。それは「スリープモードの携帯電話に象徴される常時ON状態でつながりつづける時間の流れ」とは別の流れを構成する。EREHWONの中での時間は、息をひそめ暗闇にじっと耳をすますサイドナヤ刑務所の人々と「日向ぼっこ」が重なる時間。もはや想い起こすことのできない剥き出しの時間、それは限られた記憶を手近な言葉でなんども繰り返すボブの話を裏打ちしていたもの。それは霧で侵食され現実的な中身を失った街のイメージとホワイト・アウトの瞬間。**「聞こえない・見えない」記憶イメージたち。それらのミチガイイイチガイキキチガイ〜霧の街の余白に。**

図 10
アナ☆ボルでのパフォーマンス（2017）
写真撮影　髙橋悟

図 11
作品 EREHWON より
写真撮影　来田猛

図 12
作品 EREHWON
写真撮影　来田猛

いま

ここ　　EREHWON　　そこ

かって

図 13
時間と空間が交差する孔

【付記】

引用【Ⅰ】見ちがい言いちがい / サミエル・ベケット / 訳　宇野邦一　書肆山田より、【Ⅱ】実験展示 EREHWON 鑑賞者アンケートより、【Ⅲ】記録冊子「聞こえないを聴く・見えないを視る：CASE-1 霧の街のアーカイブ」より【Ⅳ】記録冊子「聞こえないを聴く・見えないを視る：CASE-2 霧の街のクロノトープ」より